

常なる磐

つねなる いわ

令和2年12月23日(水)
その2

◇ 日本の文化 年賀状

ニュースによれば、今年は年賀状を書く人が増えているとのこと。新型コロナの影響で帰省もおぼつかなくなり、代わりに「年始の挨拶に年賀状でも書こうか」ということらしい。

日本人が年始の挨拶を大切にしていたことが分かり、少しほっとした。

SNSの進化と浸透に伴い、若者世代を中心に「年賀状離れ」が進んでいる。手間もかからず、タイムラグ（時間的なずれ）もほとんどないのが、LINEやメールをはじめとするSNS。画像はもちろん、手書きの文字まで送れる。便利と言えばそうだが、日本には受け継がれてきた文化がある。年賀状もその一つだ。

思い起こせば、「プリントゴッコ」が登場した時は衝撃的であった。それまでは一枚一枚手書きで行っていた年賀状作りが家庭で印刷できるのだ。まさに年賀状の革命だったが、パソコンと家庭用プリンターの普及により姿を消していった。…懐かしい。

パソコンで年賀状を作るようになってからは、ほとんどその年の印象はない。あて名書きから裏面の構成までちょちょいのちょい。最後にパソコンのエンターキーを押せばプリンターが勝手に印刷してくれる。あとはポストに出すだけ。しかし、苦勞をしないと、他のところに影響が出る。せっかくいただいた年賀状。その見方が変わってくる。

自分が苦勞したものや、自分が思い入れをもって臨んだものは、同様のものを目にした時、

いただいたとき、相手の苦勞や思いに自分を重ね合わせ、じっくり時間をかけて対するものだ。

それに気づいた時から、年賀状のあて名だけは全て手書きで行ってきた。

手間はかかるが、いただいた年賀状を見る時間は、間違いなく増えた。

本校の年賀状にかかわる素敵な取組がある。年賀状コンクールへの応募である。

郵便局が主催する催しだが、コンクール提出用の用紙のほか、本物の年賀状を一人一枚いただける。1・2年生は学級で、3年生以上は書写の時間を使って年賀状作りを行っているが、本物の年賀状は誰に書いてもよく、自分で考えて年賀状を作る。

出来上がった年賀状のあて名を見ると、おじいさんやおばあさんが多い。ここが素敵である。

手書き主体世代の祖父母が受け取る「孫の手書きの年賀状」。お宝以上の価値がある。

何より、おじいさん、おばあさんに書こうとする児童の優しさがうれしい。そして、日本の文化を大切にし、日本文化のよさを児童に伝えようとする職員の心意気がうれしい。

今年1年間、ありがとうございました。皆様、よいお年をお迎えください。